

崖の上で踊る

石持浅海

第八回

第四章 犯人捜し（承前）

目を覚ますと、午後三時を過ぎていた。

昼食を摂った後、少し居眠りをしていたようだ。

昼食といっても、カップ麺だ。瞳と亜麻音の、諍いとまではい
えなくてもそこそこ厳しいやりとりがあり、亜麻音を除くそれぞれ
が自室でカップ麺を食べることになったのだ。

昨日の一橋に続いて、吉崎と菊野が死体で発見された。みんなと
一緒にいるときは気が張っていたけれど、一人になって腹が満ちた
ら、一気に疲労が襲ってきたのだろう。眠った記憶もなく、気がつ

いたら目覚めていたという感じだ。一時間半くらい眠っていたらうか。

バスルームの洗面台で、コップに水を汲んで飲む。塩分を含んだスープを飲んですぐに眠ってしまったから、喉が渴いていた。コップ二杯の水を喉に流し込むと、少し落ち着いた。

ベッドルームに戻ると、ベッドに置きっぱなしだったスマートフォンが鳴った。メールではなく、電話の着信だ。液晶画面を見ると、発信者は千里だった。

スマートフォンを取り、通話ボタンを押した。「はい」

『ああ、絵麻さん』千里が安心したような声を出した。『いた？』

「いたよ」

よくわからない科白に、機械的に答える。「ちょっと、寝てた。みんな、食堂に下りてるの？」

絵麻の質問に、千里は直接答えなかった。『下りてこない？』

「わかった。下りるよ」

終話ボタンを押して、またスマートフォンをベッドに置いた。部屋の鏡で見た目を確認する。いくら気取っても仕方のない連中とはいえ、若い女として最低限の身だしなみは整えておかなければ。

支度を終えて部屋を出る。食堂に入ると、中にいる人間が一斉にこちらを見た。

「よかった」先ほど電話をかけてきた千里が言った。「無事だったのね」

無事？ どういうことだろう。疑問に思うと同時に答えが出た。

一橋も吉崎も菊野も、自分たちが自室に戻っている間に殺された。

この昼休憩の間にも、誰かが殺されると考えても、おかしくない。

絵麻は食堂にいるメンバーを確認する。雨森、江角、沙月、千里、

そして亜麻音。瞳がない。

嫌な予感が腹に溜まっていく。そつと尋ねた。

「瞳さんは？」

沙月が、自分のスマートフォンを絵馬に示した。「出ない」

眠っているのか。電話から離れていて、着信に気づいていないのか。それとも。

「シャワーかトイレかもしれない。五分経ったら、また電話してみよう」

雨森が言った。目の前には、合鍵あいかぎが置かれている。いざというときに備えて、管理人室から持ってきたのだろう。

江角は落ち着きなく、脚を組み直したり、頭のあちこちを搔かいたりしている。

千里はテーブルに肘ひじをついて、祈るように両手を組み合わせている。

沙月はじっとスマートフォンを見つめている。着信記録を見た瞳から、折り返し電話がかかってくるのを待っているように。

亜麻音は、ただ黙っていた。瞳にまったく関心を持っていないかのように、ぼんやりと宙を見つめている。

じりじりするような五分間が過ぎ、また沙月が電話をかけた。コールの後、つながる気配があった。沙月が口を開きかけるが、すぐにごっかりしたような顔で電話を切った。おそらくは「ただ今電話に出ることができません」といったメッセージが流れたのだろう。

沙月が目配せする。雨森が立ち上がった。「様子を見に行こう」

吉崎と菊野の再現だ。最悪の結末しか思いつかない。ぞろぞろと食堂を出た。

「もし、急病で苦しんでいたら？」

千里が口を開いた。雨森は前を向いたまま答える。

「救急車を呼ぶことはできない」

重い声だった。千里は気圧されたように口をつぐむ。雨森は続ける。

「昨日建物の中を見て回ったときには、自動体外式除細動器は見つからなかった。もったも、AEDはすぐに対処してこそ意味がある。僕たちは最初に電話をかけてから、五分経ってまた電話をかけるという、悠長なことをやっている。もし瞳さんの心臓に不具合が出て

いたのなら、もう手遅れだ」

冷静だが、残酷ざんこくな科白くわくだった。雨森があえてこのような発言をする以上、彼は病氣説くみに与くみしてはいないのだろう。もともと、病氣説を唱えた千里だって、本気でその可能性を考えているわけではない。黙り込んだその顔には「そんなこと言わなくても」という不満は浮かんていなかった。真実から逃げようとする、あるいはごまかそうとする気持ちからの発言だったのかもしれない。

階段を上がって、五号室の前に立つ。代表して雨森がノックした。

「瞳さん。起きてる？」

返事はない。ノックの音が次第に大きくなっていき、最後には乱打になった。吉崎や菊野のときと同じだ。それでも返事はない。

「うるさいな」とドアが開くこともなかった。

雨森がノックをやめて振り向いた。仲間たちの顔を見る。

「合鍵を、使う？」

すぐに返事する者はいなかった。合鍵を使ってドアを開けてしまえば、決定的なものを見てしまうのではないか。そんな恐れが廊下を支配していた。しかしいつまでも停滞してられない。

「使うしか、ないだろうな」

代表して江角が答えた。雨森がうなずく。合鍵をドアノブに差し込もうとして、動きを止めた。また振り返る。絵麻と目が合った。

「頼む」

そうか。女性の部屋だから、いきなり男性が開けると瞳が嫌がる
と考えたのか。相変わらず気の利く人だ。

もつとも、気が利くだけではない。雨森は瞳が無事である可能性
も考慮している。仮に雨森が、もう瞳は死んでいると決めつけてい
たら、このような発想は出ない。それが仲間への気遣いなのか、そ
れとも願望なのかは、わからないけれど。

絵麻は合鍵を受け取り、回した。がちやりとロックが外れる音が
する。ドアノブを握る。ドアを開けようとしたとき、雨森の言葉が
頭をよぎった。

——チェーンロックがかかっているだけだ。

中に瞳がいて、誰の侵入も許していなければ、チェーンロックが
かかっている可能性が高い。つまりチェーンロックがかかっていれ
ば、瞳の安全がかなりの確率で証明されるのだ。

期待と不安の入り交じった気持ちでドアを押す。ドアは、大きく
開いた。

チェーンロックは、かかっていない。背骨を直接つかまれたよう
な恐怖に襲われる。瞳はどうか。どうなっているのか。

室内に入り、ベッドを見る。ベッドには、誰もいなかった。

「……瞳さん？」

絵麻が呼びかける。返事はない。沙月がバスルームに続くドアを開けた。

「こっちにも、いない」

保養所の客室には、他に人間がいられる場所はない。絵麻たちは顔を見合わせた。

「どうも？」

代表して千里が疑問を口にした。返事はない。どう反応していいものかと迷っていたら、視界の隅に動くものを捉えた。いや、動くものではない。光の点滅だ。探すと、テーブルの上にあった。瞳のスマートフォンだ。空になったカップうどんの隣に置いてある。着信を知らせる青いランプが点滅しているのだ。おそらくは、沙月の発信を受けた記録だ。

同じことを考えたのだろう。沙月がテーブルまで歩いて行って、スマートフォンを取り上げた。ボタンを押すと、液晶画面が息を吹き返した。操作にはロックがかかっているけど、どんな通知なのかはわかる。

「やつぱり、わたしがかけたやつだ」

スマートフォンを置く。こちらを見た。その整った顔からは、困惑が見て取れる。

こちらを見られても困る。視線を逸らすようにベッドサイドに顔

を向けると、旅行カバンが置いてあるのが見えた。まだ新しい、フランスのブランドものだ。ファスナーはきちんと閉じられており、荷物が散乱したりはしていなかった。几帳面な瞳らしい。他人の目がないところでも、きちんと片付けている。

ハンドバッグはどこだ。瞳は確かハンドバッグも持っていたはずだ。あった。窓際、小型テレビの隣に置かれている。

「いないのなら、出よう」

雨森が言い、全員が五号室を出た。ドアを閉める。

「部屋には、いなかった」

雨森が、あらためて言った。

「食堂にも、キッチンもいなかったよね」

千里が応える。「じゃあ、どこにいるの？」

「どこかの部屋に隠れてる可能性はある」

江角が周囲を見回しながら言った。「合鍵は管理人室にあったわけだから、空き部屋に入るのは簡単だ。でも——」

江角は視線を雨森に固定した。「意図的に隠れてるんじゃないかな、さっきの大騒ぎで出てくるはずだな」

雨森が黙ってうなずく。江角は、瞳が意図的に隠れていると言っているのだ。生きているならば。

「建物の中にいるとは限りませんよ」

亜麻音が素っ気なく言った。「逃げてしまったのかも」

「逃げた？」

江角が不審げな顔をする。

「瞳さんが吉崎さんを殺した犯人だったら、ばれる前に逃げたとし
ても不思議はないでしょう」

亜麻音はバカにしたような顔を江角に向けた。なぜ気づかないの
かと。江角のこめかみに血管が浮いた。

「なるほど。あり得るな」

江角が怒りだすまえに、雨森が答える。「玄関と勝手口のドアは、
内側から鍵をかけているだけだ。瞳さんが出ようと思えば、簡単に
出られる。もし亜麻音さんの予想が当たっていたなら、どちらかの
鍵が開いていることになる」

雨森が誰にもなく訊いた。「確認する？」

「しよう」絵麻が答えた。「すぐにできることだし」

異論は出なかった。全員で階段を下りて、玄関に向かう。玄関の
鍵は、かかっていた。

「管理人室に、玄関の鍵はあるのかな。合鍵じゃなくて、普通に使
う方」

雨森が独り言のように言って、玄関脇の管理人室に入ろうとする。
ドアを開ける前に立ち止まり、たまたま目が合った江角を手招きす

る。一人で行動しない方がいいという当初からの考えを、あくまで遵守するつもりなのだ。察した江角が、一緒に管理入室に入る。すぐに出てきた。「あつたよ」

江角が玄関の鍵を全員に見せる。「壁にたくさんフックの付いた板が掛けられていて、『玄関』ってラベルの貼ってあるフックにかかっていた」

「本物かな」

つい、そんな言葉が口をついて出てきた。それが本当に玄関の鍵なのか、確認する必要があるのではないか。しかし雨森が首を振った。「証明するために玄関を開けたくない」

「それもそうか。たまたま誰かが通りかかったら、姿を見られちゃうからね。雨森さんが持つてる合鍵に、玄関の鍵もある？」

雨森が鍵束をひとつひとつ確認する。

「あつた。玄関っていうシールが貼ってある」

ふたつの鍵を見比べる。切り欠きのパターンは、同じに見えた。

「管理人が実際に使う鍵と、合鍵がある。さすがに、他にはないか。じゃあ、わたしたちはどうやって入ったんだっけ」

絵麻の問いかけに、雨森が宙を睨んだ。

「確か一橋さんが笛木を脅して、本社に保管している鍵を持ってこさせたんだと思う。玄関を開けてからは、鍵の所在は憶えてない。」

笛木の部屋にそのままあると思うけど、確認してない。今までは、必ずしも必要な情報じゃなかったから」

「今は鍵がかかっているわけだから、もし瞳さんが玄関から出て行ったのなら、外から鍵をかけたことになるね」頭の中で鍵をカウントする。「ってことは、笛木が持ってきた鍵を使うしかない。笛木が持ってきた鍵が見つかれば、瞳さんは外から玄関の鍵をかけられないってことになるか」

「そのとおりだ。笛木の部屋を確認する？」

全員が賛同し、再び階段を上がる。笛木の死体がある、十二号室に向かった。雨森が合鍵で解錠し、中に入る。笛木の死体はバスルームだ。全裸だから、鍵を探す分には死体を確認する必要はない。

「あった」

江角が部屋の奥を指さした。テーブルの脇に、笛木のバッグが置いてある。バッグの上に、玄関の鍵が載っていた。

「瞳さんは、玄関から出たわけじゃない」

雨森が結論を口にした。「後は、勝手口だな。この合鍵の束には、勝手口の鍵もある」

また階段を下りて、キッチンに向かう。勝手口を確認した。こちらも、鍵がかかっていた。

「ふむ」雨森が感情のこもらない反応をした。「たぶん、管理入室に

普段使いの鍵があるんだろう。瞳さんは、わざわざ勝手口から出て、しかもまったく必要のない施錠をして逃げたってことかな。しかも、荷物もスマートフォンも持たずに」

おおよそ信じていない口調くちようだった。確認のために管理人室に行くとも言わない。もちろん誰からも反対意見は出なかった。瞳逃亡を唱えた亜麻音でさえも。もつとも亜麻音は吉崎を殺した犯人に復讐ふくしゅうしたいだろうから、犯人が逃げてしまったとわかったら、ひどく落胆らくたんするに違いない。その意味では、瞳が逃げていないということとは、少なくとも亜麻音にとっては朗報だ。

「瞳さんは、まだ建物にいろってことね」

沙月がぐるりと周囲を見回した。建物全体に意識を向ける仕草しぐさだ。

「客室をチェックする？」

「そうしよう」雨森がきびすを返してキッチンから出ようとする。慌あわててついていった。

キッチンから食堂を抜けて廊下に出た。

「さつき、瞳さんの部屋と笛木の部屋は確認した。ここにいるみんなの部屋にいないとすると、残るは吉崎さんの七号室、菊野さんの九号室、一橋さんの十号室、空き部屋の十一号室ということになる」

「やっぱり、最初は菊野さんの部屋かな」

絵麻が指摘すると、雨森は短く「賛成」と答えた。メンバーの中でも、瞳と特に親しくしていたのが菊野だったからだ。

「まさか、後を追って……?」

おそろおそろ千里が言った。

「瞳さんが、後追い心中？」

冷やかな口調で沙月が問い返す。「あの人、そんな乙女おとめだったっけ」

誰も答えない。そのことが、否定を意味していた。最初に問いを発した千里でさえも。

階段を上って九号室の前に立つ。雨森はノックをしなかった。呼びかけもしなかった。合鍵を使って、いきなりドアを開けた。無造むぞう作さときっていい動きで、中に入る。しかし、すぐに立ち止まった。

「——いた」

ベッドの方を指さす。同時に脇にどいた。そのため、絵麻の目にも部屋の様子がわかった。

「——っ!」

息を呑のんだ。ベッドの脇に、瞳がうずくまっていたからだ。

床に両膝をついて、ベッドに突っ伏すような姿勢だ。こちらに背を向けている。ベッドには菊野が横たわっているから、まるで菊野に取りすがって泣いているように見える。しかし現実には瞳は泣い

ていない。泣くどころか、動きすらしていない。

「首……」

沙月が低い声でつぶやいた。指摘されるまでもない。ここからでも、瞳の後頭部と首の付け根から、ナイフの柄が生えているのが見えた。

一橋もそうだった。吉崎も、菊野も。みんな同じ場所に凶器が刺さっていた。そして、完全なる静止。間違いない。瞳は死んでいるのだ。

すうっと脚から力が抜けていくのを感じた。上体がふらつき、雨森に身体がぶつかった。

「あ、ごめん」

すぐに離れる。雨森が心配そうな顔でこちらを見た。「大丈夫？」

「うん。大丈夫」

そう答えたときには、少し冷静さを取り戻していた。最初の衝撃をやり過ぎしてしまうと、理性は戻りやすい。笛木殺害に立ち会ったときから、死体に関する感覚が麻痺している。

瞳が死んでいる。しかも、菊野の部屋で。

これで、四人目だ。一橋が死に、吉崎が死に、菊野が死んだ。そして瞳。二十四時間も経たない間に、四人の仲間が死んだ。いったい、何が起こっているのか。

「見てくれ」江角が床を指し示した。「懐中電灯が落ちてる」

伸ばされた指の延長線上を見る。確かに懐中電灯が落ちていた。

しかも、二本。同じ型だ。

「あれかな」続いて江角が壁の下の方を指さす。懐中電灯の固定具が壁に取り付けられていて、そこに懐中電灯はなかった。でも、二本というのは？

「もう一本は、瞳さんが持ってきたんだと思う」雨森が独り言のように言った。「あまり重要な問題とは思わないけど、後で確認した方がいいかもしれない」

「今は、昼間だよね」

沙月が指摘する。「どうして懐中電灯？」

「そりゃあ、武器だろう」江角が答える。「部屋に武器になりそうなものといえば、懐中電灯くらいしかない」

「あら」沙月が面白そうに目を細めた。「よくご存じで」

「そりゃあ、そのくらい調べるよ」心外な、と言いたげに江角が唇を尖らせる。「二人も殺されてるんだ。俺も、いつ狙われるか、わかったもんじゃない。自衛のための武器を探すのは、当然だ」

当然と言われても、まったく考えつかなかった絵麻としては、コメントしようがない。代わりに違うことを言った。

「ということとは、瞳さんは誰かと会うためにここに来たってこと

か

「そうでしょうね。瞳さんが菊野さんとの思い出に浸るひたために来たとは思えない」

あくまで現実的な沙月の答えだった。

「呼び出したのか、呼び出されたのか……」

「それはわからない」そう言いながら、雨森が瞳に近づいた。かがみ込んで、瞳の頭部をしげしげと見つめた。

「どうしたの？」

観察をやめずに雨森が答えた。

「殴なぐられた痕あとがないかと思って。ほら、今までの三人と違って、瞳さんは警戒していたはずだ。無警戒に同じ場所を刺されるとは考えられない。懐中電灯で殴られて、動きを止められてから刺されたのなら、納得がいく」

「確かにな」

江角が雨森の隣に立った。同じように瞳の頭部を観察する。

「よくわからない」雨森が江角に声をかける。「額も確認しようか。顔を上げさせよう。確認してくれないか」

「わかった」

雨森が瞳の肩に手をかけて、ゆっくりと身体を起こしていった。

瞳の頭部がベッドから離れて浮いていく。「どっどっ」

いくら仲間でも、いや、仲間だからこそ、死体の顔を見るのは嫌なものだ。江角は気力を奮い立たせるように、一度全身に力を込めた。瞳の顔を覗きこむ^{のぞ}。途端に、江角の動きが止まった。「——なんだ、これは」

「どうした？」

江角は視線を瞳の顔に固定したまま答えた。

「雨森さん。そのまま瞳さんの身体を後ろに倒してくれ」

意味がわからないけれど、雨森は従った。瞳の身体をさらに引く。身体が地面と垂直になり、のけぞるように顔が上を向いた。そのため瞳の顔面が、全員が見えるようになった。

瞳の口に、カードのようなものが押し込まれていた。

「何？ これ」

沙月が同じことを言う。江角がそつと手を伸ばして、カードのようなものをつまむ。ゆっくりと引き出した。引き出されたそれは、見慣れたものだった。自動車運転免許証だ。免許証を、ベッドの上に置く。唾液で濡れていたのか、江角はつまんでいた指を服にこすりつけていた。

全員の目が、免許証に注がれていた^{そそ}。瞳は優良運転手なのか、それとも普段は車を運転しないペーパードライバーなのか、金色のラインが入ったゴールド免許だ。顔写真は、間違いなく瞳のもの。し

かしみんなが注目したのは、免許の色でも顔写真でもなかった。

西山瞳。
にしやま

氏名の欄には、そう記載されていた。

たつぷり五秒間は、みんな黙って免許証を見つめていた。

「瞳さん、奥本おくもとっていつてたよね」

沙月が沈黙を破った。千里が機械のようにならずく。「うん」

そして顔を上げた。「西山って、あの西山……？」

自分たちが西山と聞いて思い浮かべるのは、一人しかいない。標
的の一人、フウジンブレード専務の西山和則。
かずのり

「ありふれた名字ではあるな」

雨森がそう言って、瞳の身体を元の位置に戻した。免許証を取り
上げて、きびすを返す。「確認しよう」

ドアに向かう。沙月が戸惑ったような声を上げた。「どこ行く
の？」

「会議室」ドアノブに手をかけながら雨森が答える。「一橋さんが、
西山の住所も調べてくれた。確か印刷して、そのままパソコンの
傍に置きっぱなしだ」

ここは保養所だけれど、研修目的でも使用されていたようだ。会
議室のような部屋があり、パソコンが設置されていた。昨日ここに
やってきたとき、笛木に本社のサーバーにアクセスさせて、様々な

情報を得たのだった。

全員で九号室を出た。階段を下りて、会議室に向かう。会議室は、管理人室と食堂の間にある。ブラインドを下ろしているから、会議室は薄暗い。照明を点けて中に入った。

「これだ」

雨森がコピー用紙を取り上げた。西山の住所が印刷されているコピー用紙と、瞳の免許証を並べて机に置く。どちらにも、千葉県千葉市の住所が書かれてあった。

「同じ、だね」

千里が短く言った。

絵麻は住所を眺めながら、昨日のことを思い出していた。

——やめた方がいいよ。

西山をどこで殺害するか議論していたときのことだ。自宅で襲う案を雨森が提案したら、瞳が即座に反対したのだ。

——住宅地の真ん中だから、知らない人間が変な動きをしたら、一発で通報されちゃう。

考えてみたら変だ。瞳は西山の住所を見ただけで、なぜ住宅街の真ん中だとわかったのか。

「……絵麻さん？」

突然声をかけられ、我に返る。雨森が不思議そうな顔でこちらを

見てきた。疑念が顔に出ているのだろう。絵麻はたった今思い出したことを告げた。

「それもそうだ。完全に聞き流してた」雨森が感心したような声を出した。「住所を見るかぎり、瞳さんは西山と同居している。自分の家で事件を起こされなくなかったってことか」

「西山と同居」千里が混乱したように頭を振った。「どういうこと？瞳さんは、西山の家族だったってこと？」

「そういうことだろうな」江角が答える。「年齢を考えたら、奥さんか、姉か妹」

雨森が腕組みをした。「奥本つてのが完全に偽名ぎめいなのかどうか。奥さんなら旧姓だし、きょうだいなら新姓つてことが考えられる」

「新姓があるなら、免許には新姓が書かれてるよ」沙月が険しい顔でコメントした。「出戻りつて可能性もあるけど、奥さんと考えた方が自然じゃないの？」

「そう思う」答えながら雨森は仲間たちを見回した。「食堂に戻らないか？」

反対する者はおらず、コピー用紙と免許証を持って食堂に戻った。昼食前と同じ席に座る。

「僕たち原告は、訴状に名前を書いている」

雨森はそう切り出した。「ここに偽名を書くわけにはいかないか

ら、少なくとも僕、江角さん、沙月さん、絵麻さんは本名を名乗る必要がある。でも瞳さんは違う。フウジンブレードから被害を受けたというのは自己申告だから、偽名でもいいわけだ」

「わたしは本名だよ」千里が言った。「なんなら、免許証を見せようか？」

雨森は軽く手を振った。「今は、いいよ。ともかく、瞳さんは本名を隠して僕たちに近づいた。何のためだろう」

「スパイじゃないですか？」

亜麻音が答えた。瞳に対する敵意に満ちた発言だったけれど、今度は誰の反発も招かなかった。

「そう考えるしか、ないだろうな」

先ほどは亜麻音に対して怒りの表情を見せていた江角も賛成した。

「瞳さんの夫は、会社でフウジンブレード相手の営業担当だった。

顧客であるフウジンブレードから、いじめに近い無理難題を連発されて、心が壊れた。それで瞳さんはフウジンブレードを恨んで、俺たちの復讐に参加した——少なくとも本人は、そう言ってたよな」

「事実じゃなかったってことね」千里がため息交じりに言った。

「フウジンブレード相手の営業担当じゃなくて、フウジンブレードの社員だった。それも、経営幹部」

取締役専務は正確に言えば社員ではないと思うけれど、本質では

ないからいちいち訂正ていせいしない。そんなことよりも、他に気づいたことがあった。

「瞳さんの旅行カバン。ブランドものだったよね」

絵麻がそう言うと、皆が怪訝けげんな顔をした。それがどうしたのかと。絵麻は話を続ける。

「旦那さんはフウジンブレードのせいで、心が壊れて会社を辞めざるを得なくなりました。今の旦那さんの状態がどんな感じなのか知らないけど、経済的にはきついんじゃないのかな。それなのに、新しいブランドものを買えるだけのお金を持ってたってことだよ。実家が資産家なのかもしれないけど」

「……なるほど」

雨森が免許証を見つめながら言った。「打ち合わせの後、何回か瞳さんと菊野さんが二人で食事に行ってた。菊野さんから、瞳さんに食事代を出してもらったと聞いたことがある。そのときは、菊野さんはバイトを掛け持ちして家計を支えている立場だから、おごられるのも仕方がないかと思ってた。でも絵麻さんの言うとおりで。旦那さんが失業しているのなら、お金はできるだけ節約したいはずだ。菊野さんの食事代を持つ余裕はない」

瞳と菊野が二人で食事に行った話は、メンバーなら誰でも知っている。毎回でなくても、菊野が払ってもらったのも。自分たちは、

なんとなく瞳が菊野のことを息子のように思っていると感じていた。母親が息子の食事を支払うのは自然なことだ。だから気にもしていなかった。でも、よく考えれば理屈に合わない話なのだ。

「そうか」千里が、こちらには宙を睨んだ。「瞳さんは、普段の生活で自分の正体を暴露してたのか。フウジンブレードはブラック企業だから、社員の給料は安いって、一橋さんが言ってたよね。業績は悪くないわけだから、一部の経営幹部だけが甘い汁を吸っていても、おかしくない」

そして全員を見た。

「瞳さんが西山の奥さんだったとして、瞳さんは、西山の指示で、わたしたちに近づいたのかな」

「当然だろう」江角が即答する。「瞳さんは、むしろフウジンブレードを護^{まも}らなければならない立場だ」

「じゃあ、わたしたちの動きは、フウジンブレードに筒抜けだったってこと？」

沙月が語気を強めた。「瞳さんが、逐一^{いちいち}西山に報告してたって？」
「そう考えた方がいい」

江角が答えると、沙月は江角を睨みつけた。まるで彼が瞳であるかのように。

しかし雨森が掌^{てのひら}をこちらに向けた。制止するときの仕草だ。

「ちょっと待って。もし瞳さんが敵方の人間だったとしても、現実的に僕たちは、復讐計画を邪魔されていない。こうして潜伏拠点も得られたし、三人のターゲットのうち、笛木を殺すことにも成功した。残る二人のスケジュールも把握できたから、実効性のある殺害計画も練ることができた。仲間たちは次々と殺されているけど、フウジンブレードへの復讐という点では、順調に進んでるんだ。瞳さんが僕たちの動きを西山に流してるんなら、なぜ僕たちを放置してるんだ？ 自分を殺す話をされてるのに」

「あつ、そうか」

「つい、そんな言葉が口について出てきた。確かに、自分たちは妨害されていない。」

「妨害されてるじゃないですか」

「亜麻音が口を挟んだ。」「吉崎さん、一橋さん、菊野さんの三人が殺されています。さっきから、復讐の妨害が動機だっという話がありました。この中に、裏切り者がいるって。瞳さんは裏切り者です。瞳さんが西山のために、メンバーを一人一人殺した。間違いないと思います」

「うん」雨森が腕組みをした。「確かに、筋は通っている。検証のために、四点考えるべきことがあると思う」

「四点って？」

絵麻の問いかけに、雨森は握り拳を作って見せた。人差し指だけを立てる。

「ひとつは、これも前々から議論されていることだ。復讐を妨害したいのなら、どうして笛木殺しは妨害しなかったんだらう」

「それは簡単」沙月が答えた。「お昼休みの直前に、みんなで話してたじゃない。笛木は裁判で証言台に立つ立場。失言でもされたら会社が不利になる。わたしたちは笛木を口封じすることによって、中道や西山に荷担したのかもしれないって。つまり笛木殺しは瞳さんにとってもメリットがあった。というか、わたしたちの復讐心を利用して、笛木を排除したんだよ」

「笛木は開発部長だった」江角が後を引き取った。「どんどん出世する笛木が、西山にとっては邪魔に存在だったことは間違いない。将来のライバルを早めに処分してしまう狙いもあったんだらう」

雨森が周囲を見回した。反応を見るためだ。皆、一様に賛同の意を示していた。絵麻も同様だ。見事なまでに、理屈に合っている。

「わかった」雨森は人差し指に続いて、中指を立てた。

「次。瞳さんは、この場所にいる。笛木殺害に立ち会ったわけだ。僕は警察に捕まる気はさらさらないけど、そのリスクはある。警察の捜査で瞳さんがここにいたことがわかったら、共犯で逮捕されるのは確実だ。妻が社員殺害に関わったとあれば、西山の失脚は疑い

ない。西山も瞳さんも、そんなリスクを追ってまで、笛木を殺した
いのかな」

意外な方向からの指摘に、沙月と江角が答えに詰まった。代わつ
て答えたのは亜麻音だった。

「簡単ですよ。わたしたちを皆殺しにして、自分だけ逃げるつもり
だったんです。笛木殺しの罪を全部わたしたちになすりつけて、自
分がいた痕跡こんせきだけ消す。雨森さんは保養所に放火するって言ってま
したけど、瞳さんも同じことを考えていたのかもしれない。リス
クを負ってでも、笛木を亡なき者にしたかった。それはあり得るでし
ょう」

これまた見事な解答だった。雨森もうなずく。

「うん。あり得るね。じゃあ、三つ目。瞳さんが仲間たちを殺して
回つてるとして、瞳さんが殺されたことは、どう解釈すればいいん
だろう。瞳さんがまた誰かを殺そうとして、返り討うちに遭あったと考
えるべきなんだろうか」

今度はすぐに返答はなかった。

絵麻も考える。雨森の仮説は、もつともだと思う。しかし、何か
がおかしい気もしている。考えをまとめるためにも、まず言葉に出
してみることにした。

「菊野さんの部屋には、懐中電灯が二本落ちてたよね。一本は、菊

野さんの部屋のものらしい。とすると、もう一本は外から持ち込まれたもの。雨森さんは瞳さんが持ってきたんじゃないかと言ったけど、もしそうなら、瞳さんはやっぱり攻撃するつもりで用意したのかな」

「そうとも限らない」雨森が答える。「防御のためという可能性もある。ほら、江角さん言ってたじゃないか。自衛を考えたら、部屋には懐中電灯くらいしか武器になりそうなものがないって」

「自衛？」亜麻音が眉間にしわを寄せた。「攻撃じゃないんですか？」

「うん」雨森は申し訳なさそうな顔をした。「実は僕は、防御の可能性の方が高いと思ってる。さっき僕は返り討ち説を提示したけど、これって、瞳さん視点の話だね。相手からすれば、瞳さんに襲われて反撃したわけだ。結果的に瞳さんが死んでしまったとはいえ、自分は自分の身を護っただけという気持ちだろう」

「……そうですね」

今まで、何かにつけ雨森に反発していた亜麻音も、認めざるを得なかった。少なくとも、多少は考えてから返事することができるようになった。昼食前に、雨森が冷静になれと諭さとしたことが、効きいているのだろうか。

雨森は亜麻音の返答に少しだけ目を細めた。

「たとえ話に登場してもらって申し訳ないけど、瞳さんが亜麻音さんに突然襲いかかってきたとしよう」

亜麻音がまた表情を険しくする。「はい」

「亜麻音さんは必死に抵抗して、結果として戦いに勝った。この場合、瞳さんが生きていても死んでいても、どっちでもいい。ともかく瞳さんから戦闘力を奪うことができた。ここで、君はどうするだろうか。黙ってその場を離れるか、それとも大声でみんなを呼ぶか」

亜麻音は一度きゅつと唇を閉じ、そして開いた。

「皆さんを、呼ぶでしようね」

「だと思っ」雨森はにつこりとした。「襲ってきた以上、瞳さんが吉崎さんや菊野さんを殺した犯人だと考える。君は吉崎さんの復讐のため、瞳さんにとどめを刺すかもしれないけど、少なくとも瞳さんは敵であり、裏切り者だ。犯人がわかったとみんなに告げるのが自然だと思う。でも、現実の犯人はそうしなかった。突然瞳さんに襲われても、それをみんなに言いたくない理由があるのか、それとも――」

「瞳さんの方が、襲われた立場なのか」

絵麻が後を引き取った。

食堂の空気が固まった。お互いが目配せし合う。

「そういうことなんだ」雨森が息を吐いた。「二本の懐中電灯の存在は、瞳さんが犯人であっても被害者であっても説明できる。でも瞳さん犯人説は、返り討ちにした人が何も言っていないという事実を説明できない」

雨森が言葉を切ると、居心地の悪い沈黙が食堂を覆った。

沙月が頭を振った。

「瞳さんは、犯人じゃないって？」

「おそらくは」

「裏切り者じゃないって？」

「それはわからない」無責任なまであっさりとして、雨森は答えた。

「瞳さんはスパイとして潜入せんにゆうしていたのかもしれない。僕たちのやりとりを、逐一西山に報告していたのかもしれない。あるいは、まったく違う理由——たとえば夫を殺したいほど憎んでいて、僕たちを利用して夫を殺すつもりだったとかの理由で、仲間入りしたのかもしれない。今は検証しようがないし、どっちでもいい。どっちであつても、瞳さんは犯人じゃないと思う」

そして誰にともなく言った。

「犯人くんは、抜かったね。瞳さんを殺した後、大騒ぎすればよかったんだ。免許証からも、犯人は瞳さんの正体に気づいていたことがわかる。殺害してから、瞳さんの正体を暴あはいて、裏切り者だと言

いたてればよかった。先ほどからの、みんなの議論どおりだよ。正体がわかれば、瞳さんはフウジンブレード側の人間であり、復讐の妨害をするために仲間たちを殺していたんだと主張できる。そうしたら、これ以上事件は起こらないと、みんな信じ込む。犯人である瞳さんはもう死んでしまったと油断するから。もう一人くらいは殺せたかもしれないのに。たぶん、吉崎さんや菊野さんと同じ目的で殺したから、そこまで考えられなかった」

そして雨森は最後の指、小指を立てた。

「犯人は、まだ生きている。そして四つ目——」

雨森は、全員を等分に見た。

「それは、誰だろう」

〈つづく〉